

# 宿縁

九月号

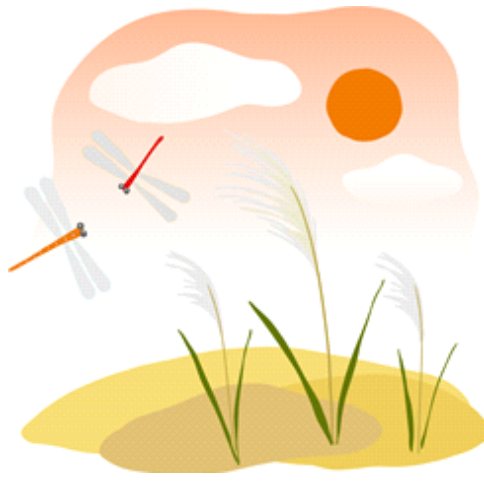
千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号  
浄土真宗  
本願寺派

## 中原寺

TEL 〇四七—三七二—〇二九二  
FAX 〇四七—三七二—〇二六二

あなたは 何を

バトンタッチするか  
(財産? 名誉? 権力?)



「しんでくれた」 詩・谷川俊太郎  
うし

しんでくれた ぼくのために  
そいではんばーくになった  
ありがとう うし

ほんとはね  
ぶたもしんでくれてる  
にわとりも それから  
いわしやさんまやさけやあさりや  
いっぱいしんでくれてる  
ぼくはしんでやれない

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号  
浄土真宗  
本願寺派

## 中原寺

TEL 〇四七—三七二—〇二九二  
FAX 〇四七—三七二—〇二六二

だれもぼくをたべないから

それに もししんだら

おかあさんがなく

おとうさんがなく

おばあちゃんも いもうとも

だからぼくはいきる

うしのぶん ぶたのぶん

しんでくれたいきもののぶん

ぜんぶ

谷川さんのこの詩は、誰にでもわかる言葉で、多くの生きもののいのちを食べなければ生きてゆけない私たちの存在の悲しみと生きていく意味を投げかけています。

夏休み明けの今、昨年9月15日に亡くなった女優の樹木希林さんと娘内田也哉子さん共作「母からのバトン」『どうか、生きて』が話題になっています。

「死なないで、ね…どうか、生きてください  
い…」

希林さんは亡くなる半月前の9月1日、入院していた病室から窓の外に向かって、繰り返し語りかけていました。「死なないで」の言葉を最初に聞いたときは、何のことを言っているのかわからず、也哉子さんはびっくりしたそうです。

自ら命を絶つ子どもが最も多いのは、日付別で9月1日だと4年前、内閣府が発表

しました。そのことを知って、樹木希林さんは「9月1日」を意識し始めたようです。

病気で気力も体力もなかった我が身でありながら、未来のある子どもたちが自分で命を絶つ理不尽さに「何とか死なないで！」と叫んでいる母の姿から、「尊いいのちのバトン」を受け取ったことを娘の也哉子さんは自らの不登校の経験や母の言葉を胸に、

「学校に行けずに引きこもってしまう人は、やわらかい感受性を持った人。悩むことができるのはすごい才能です。長く続くかもしれないが、暗闇が深ければ深いほど、抜け出すと無敵、強くなります」と自分を追い詰めないように願っています。

ここで誰もが注目すべきは、樹木希林・内田也哉子母娘に受け継がれた「いのちのバトンタッチ」ということです。

モノをつくり出すことの能力のすばらしさと人間の優越性を教える近代文明はいつしか大切な部分を見落としてしまいました。それはすべてを生み出す根源にあるものへの不思議さと畏敬の念です。生命として表現し理解するのはあくまでも生物的思考に基づくいのちの理屈であって、ここからのちの不思議に気づくことは極めて難しいことです。「不思議」とは本来仏教で説く「不思議」という用語で、人間の能力を超えた説明と納得の及ばないことをいうのです。まさに、言葉で言い表したり心でおしはかることのできないことを「不可思議」というのです。「いのちの不思議のバトンタッチ」は能力主義、合理主義、優越性を第一と教える生き方からは出てくるものではありません。それは見えないものは否定し、説明できないもの

を拒むという人間(自分)中心主義の愚かな道です。

チコちゃんは「今こそすべての国民に問います！」というNHK番組の流行語がありますが、今こそお互いに「私がこの世に生まれた意味と目的は？」と己れ自身に問いたいものです。

親鸞さまは、「お釈迦さまがこの世にお出ましになった目的(出世本懐)は『ただすべてのものをわが願力で救いたい、迷いから解放させたい』という誓いを建て、成就して南無阿彌陀仏という言葉になってすべてのもに届けられているのだという』阿彌陀仏の法を説くためであった」と述べられました。

そしてその教えに出遇って「親鸞自身がこの世に生まれ、生きることの意味に目覚めたのは、ひとえに釈尊が説かれた阿彌陀仏の救いに出遇わせていただくためであった」と、闇から光に転ぜられた不思議を喜ばれました。

悩むことは、自分の在り方に問題を投げかけているからです。自分自身を問題としているからです。光に遇うのはそこから大事な出発点です。闇を意識するのは謙虚に現在を受けとめている証拠です。自分の人生は終わり、と決めつけないで、何事も他人と比較せず、あせらずに自分の安心できる場を探しましょう。必ず理解をし寄りそってくれる人と時と場を発見します。

世の中のいのちといういのちは全部こしらえものではないから一つとして同じものは有りません、だから一つひとつがみな尊いのです。「みんな違ってみんないい！」と言えるいのちの尊さを真に受けとめ、バトンタッチするのが仏教徒の使命です。

【寺灯雑記】

○孟蘭盆会法要での法話

8/11

—原山建郎—

父の墓所がある中原寺の聞法会館で営まれた孟蘭盆会法要並びに全戦没者追悼法要に参列した。浄土真宗では、お盆の時期に先祖の霊がこの世(此岸)に還ってくるという理由で法要を営むのではなく、故人(先祖)はすでに浄土(彼岸)で仏となつていいるのだから、此岸で暮らしている私たちが報恩謝徳(おかげさま)の念を深めるために、孟蘭盆会法要を営むのだという。

法要が勤められたあと、布教使松岡満優師の法話を聴聞した。法話の中で板書された「平生業成」(へいぜいごうじょう)が今回の重要な主題だと思う。「平生(死んでからではない、いま生きているとき)業成(重要な人生の目的は、いま完成できる)」の語意だけでは、いったい何のことかよくわからなかったが、難病のメチルマロン酸血症で入院を繰り返して、5歳半で亡くなった愛娘の話をする中で、「私たちは、これから救われるのではない。すでにいま救われているのだ、ということだ」というひと言が、私の胸にストンと落ちた。

松岡さんの愛娘、唯ちゃんは、生後8か月のときに原因不明の嘔吐、意識不明の危篤状態に陥った。しかし、病名は不明のまま、多くの検査が行われ、不安な日々が続いた。約一か月後、主治医から松岡さん夫婦に対して、唯ちゃんは50万人に1人の難病という説明があった。そしてそのような病気への治療に身をゆだねたが、やがて5歳6か月の人生を終えた。

唯ちゃんの遺体を乗せて自宅に帰る車の中で妻が「お父ちゃん、浄土真宗でよかつたね。お念仏いただいてよかつたね」といいました。

唯が亡くなる前日、医師が涙を浮かべながら「お父さん、申し訳ないんですが、どうすることもできないんです。私に「先生、申し訳ないどころか、どうすることもできないんです。そりゃ阿弥陀さまにおまかせするしかないんですよ。どうすることもできない」と言われて、かえって胆がすわりました」とこたえました。

この夫婦の会話の意味するところは、仏教の中でも浄土真宗の重要な中心教義である「往相廻向(阿弥陀さまの本願力によって、浄土に往生し成仏するように約束されていること)・還相廻向(浄土に往生し成仏したあと阿弥陀さまの本願の力によって、再びこの世に還って迷える人びとを救うように約束されていること)」である。松岡さん夫妻は、愛娘の唯ちゃんが亡くなったあと、間違いなくお浄土に救い摂られる(往相廻向)という確信と、お浄土で仏さまとなった唯ちゃんが再びこの世に還ってきて、人びとを救うはたらきとして願われる(還相廻向)という希望をいたただいて、その喜びを素直に表現した言葉だったのでないだろうか。松岡さんは法話の最後に、「願生」という言葉を紹介された。これを「願われて生きる」と表現された。「願われて生きる」、松岡さんのお顔は、とても素敵なお父さんの笑顔でした。

(右の文は原山さんの文章から一部を抜粋して掲載させていただきました。)

○夏休み子ども合宿を経験

8/24~25

第二十三回を迎えた夏休み子ども合宿が

二年ぶりに開催され、今回は十三名の小学生が参加し一泊二日の日程を過ごしました。今回の合宿では、参加した思い出を将来に残そうとのことで台紙に子どもたちの手形を取り、楽しかった事を書いてもらい記念誌を作製しました。

一日目、開会式では「らいはいのうた」と三つのやくそくを一緒に唱和、自己紹介、タングラー作り等々。お抹茶の時間では中学生のOB、T・Kくんが、部活で茶道をされており、お手を披露してくれました。

その後、笑顔の湯での入浴、境内でのバーベキュー、大学二年OBのT・Yくんが少林寺拳法の型の披露。力強い声と姿に息をのみました。

二日目は、近隣にある千葉商科大学の学生さん二人が担当し、スタッフさん子どもたちも大はしゃぎのゲーム大会になりました。閉会式では、住職さんから修了証をいただき、保護者さんの前でNHK2002応援ソング「パプリカ」を踊り付きで披露しました。

このたびの合宿では、かつての合宿参加者の卒業生が中心となり手伝ってくれました。また近隣にある千葉商科大学の学生さん、参加者のお母様、壮年会、婦人会の皆さまのお手伝いのおかげで無事に終了いたしました。ありがとうございました。

(報告者 坊守)

【法要・法座・行事案内】

※秋の彼岸会法要修行

◎九月二十三日(秋分の日) 一時

\*お勤め—仏説阿弥陀経

\*法話—住職、前任職

耳を澄ませばお浄土からのやわらかな風とあたたかな光が感じとれます。

○婦人会讃寿の集い(昼食と歓談)

九月七日(土) 十一時

○壮年会法座(九月の法語と座談会)

九月七日(土) 三時

○子育てサロン

九月九日(月) 十一時~二時

○いのちの居場所を考える会

九月二十六日(木) 十時

○教行信証を学ぶ(「教文類」の味わい)

九月二十八日(土) 二時

※第三十一回中原寺文化講演会

十月十九日(土) 一時半開演

イラン生まれの女優サヘル・ローズさんが語る「出会いこそ 生きる力」の講演を、ご期待ください。ご来場をお待ちしています。

【九月の掲示板のことば】

人生に大切なものは 包まれている 護られているという 感覚をもつことです